

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH

CENTER NEWS No.146 August 2016

## 研究の最前線

### ◆ 2016年度夏期国際シンポジウムが開催される ◆

センター定例の夏期国際シンポジウムが、今年は「ロシア極北：競合するフロンティア」をテーマとして、7月7日（木）と8日（金）にセンター大会議室で開催されました。センターでは、日本学術振興会のフィンランドとの二国間交流事業として、「ロシア最後のエネルギー・フロンティア：極北地域の持続的発展への挑戦」と題する共同研究が2014年から2年間の予定でおこなわれてきました。今回の国際シン



会場を埋めた聴衆

ポジウムは、この共同研究の成果を発表する場と位置付けられました。また、このプロジェクトのメンバーではない、ロシアをはじめとする第三国の研究者も報告をおこないました。

シンポジウムでは、6つのセッションが設けられ、ロシア極北地域におけるエネルギー開発、先住民の生活、環境問題、北極海航路、ロシアの北極外交、極北のイメージなどをテーマに、計18本の報告がなされました。報告者の国別では、日本が6本、ロシアが5本、フィンランドが3



レセプションの一コマ

本、ノルウェー、オランダ、ドイツ、中国が各1本でした。上述のプロジェクトも学際的なものでしたが、この国際シンポにも、経済学、地理学、地質学、工学、政治学、国際関係論、社会学、文化人類学、文学など北極に関わる多様な分野の研究者が集まりました。例年のセンターの国際シンポジウムでは見かけないような自然科学系の研究者が参加されていたことも大きな特徴の1つでした。参加者は2日間で178名でした。

ロシア北極圏地域における石油・ガス開発や北極海航路は、原油価格低落の大きな影響を受けています。また、ウクライナ紛争に起因する経済制裁やロシアと欧米の対立も、ロシア極北地域の開発や北極をめぐる国際関係に悪影響を及ぼしています。そのような逆風のなかでも、ヤマル半島におけるサベッタ港の建設や天然ガスの開発は国際的な協力により続けられており、2017年から北極海航路を通じたLNGの輸出が始まると見込まれています。航路の安全性の確保、環境の保全、先住民の権利の保護、北極を取り巻く国際政治の把握等々、研究者が取り組むべき課題がまだまだ多いことがこのシンポジウムを通じて明らかになったように思われました。

なお、上述のプロジェクトでは、次世代研究者の育成が重視されていたことから、このシンポジウムの前日夕刻には、若手研究者セミナーが開かれ、日本人2名、フィンランド人、中国人各1名が報告をおこないました。[田畑]

### ◆ ボーダースタディーズ・サマースクール開催される ◆



デイビッド・シムによる講義のようす

2016年7月25日(月)から29日(金)にかけて、スラブ・ユーラシア研究センターは公共政策大学院と共催で「ボーダースタディーズ・サマースクール2016」を開催しました。国籍ベースで21カ国から、54名(講師・聴講生を含む)の参加がありました。そのうち、外国人の参加者数は43名でした。なお、サマースクールは、北海道大学サマーインスティテュートの枠内で実施され、登録者には単位認定もおこなわれます。

サマースクールの講義スケジュールは以下のとおりです(以下、講師などすべて敬称略)。

#### 7月25日(月)

Introduction to the course: Overview, ice breaker  
Theoretical Framework on Border Studies I (アレクサンダー・ディーナー、カンザス大)  
Theoretical Framework on Border Studies II (同)  
Borders and International Relations I: Borders in East Asia (岩下明裕、センター)

#### 7月26日(火)

Borders and International Relations II: North Korean issue (デイビッド・シム、フローニンゲン大)  
Borders and International Relations III: Unrecognized states in Eurasia(藤森信吉、センター)  
Borders and International Relations IV: Sustainable Arctic (田畑伸一郎、センター)  
映画上映会「Hafu (ハーフ)」

#### 7月27日(水)

Borders and Migration I: Case study of Europe (ポール・フライヤー、東フィンランド大)  
Borders and Migration II: Case study of East Asia (池直美、公共政策大学院)  
Borders and Culture: Migration and Foodscapes (ヨニ・ヴィルックネン、東フィンランド大)  
Borders and Environment: Case Study of Central Asia (地田徹朗、センター)

#### 7月28日(木)

Borders and Diversity: The Ainu indigenous people and Japanese indigenous policy (阿部千里、アイヌ・先住民族電影社) 北海道大学総合博物館見学  
参加学生によるグループ・プレゼンテーション

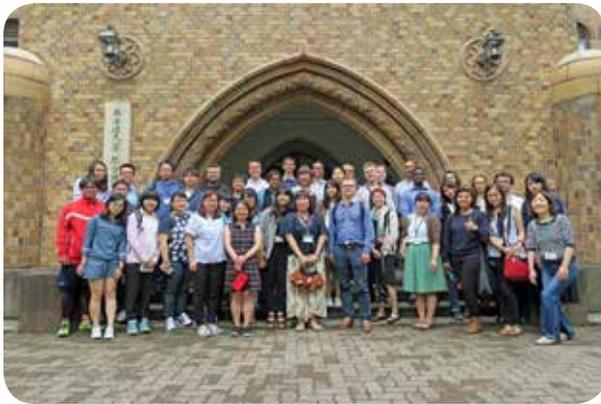
7月29日(金)

希望者によるエクスカージョン(アイヌ民族博物館「ポロトコタン」と飛生アートコミュニティを訪問)

ボーダースタディーズ理論、領土問題と国際関係、「視覚の政治」と地政学、非承認国家、北極圏の経済開発、移民をめぐるポリティクスや移民の生活実態、多文化共生、環境とボーダー、アイヌ民族の歴史と現状など、バラエティに富み、内容面でバランスのよい講義内容は参加者に非常に好評でした。初日に9つの班分けをおこない、参加者の自主的な取り組みに委ねたグループワーク

については、「2030年の世界」について、移民・環境・世界経済などの

トピックの中から各グループが1つを選択し、グループごとに内容をまとめ上げ、参加者全員が何らかの報告をするという形式でおこなわれました。聴講生を含む参加者のレベルは様々でしたが、英語で報告をするのが初めてという参加者もあり、ボーダースタディーズについての知識のブラッシュアップが図られたというだけでなく、教育的効果も非常に高いものでした。



北大総合博物館での記念写真

非常に実り多いものとなりました。飛生アートコミュニティでは、主宰の国松希根太より、「飛生芸術祭／飛生キャンプ」の企画・開催や「飛生の森」の整備など、白老町や飛生地区のリソースを活用した参加型のアート活動について紹介をいただきました。また、自らが彫刻家・画家である国松の作品そのものが境界線をテーマとしており、参加者からは作品のモチーフについて様々な質問が飛び交いました。

初日にはウェルカムパーティーが、グループ・プレゼンテーションの終了後にはオール・ダン・パーティーが開かれ、最終日のエクスカージョンを含め、講師・参加者・スタッフの間での親睦が図られました。サマースクールは、若手研究者との国際的な繋がりをつくる「将来への投資」の機会でもあります。これを機に、スラブ・ユーラシア研究センター並びに境界研究ユニットは、ボーダースタディーズの裾野をさらに広げ、さらなる国際学術交流・協力を邁進してゆく所存です。講師の先生方、スタッフの方々、そして、近くは日本国内から遠くはアフリカのガーナまで、世界各地から札幌にお越しいただいた参加者の皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。[地田]



グループ・プレゼンテーションのようす M1の千須和さんも頑張りました

最終日には、ポスト・スクール・エクスカージョンを実施しました。白老町にあるアイヌ民族博物館「ポロトコタン」と飛生アートコミュニティを訪れました。ポロトコタンまでのバス車内では、山崎幸治(アイヌ・先住民研究センター)にポロトコタン創設の歴史と現状について解説をしていただきました。前日の阿部千里による講義と共に、事前にアイヌ民族についての知識を得た上での「ポロトコタン」視察やそこでの文化体験は非

◆ マケドニア共和国大使がセンターを訪問される ◆



ツヴェトコビッチ大使（中央）

マケドニア共和国のアンドリヤナ・ツヴェトコビッチ大使が7月20日にセンターを訪問され、講演会がおこなわれました。大使は、2014年10月に開設されたマケドニア大使館の初代大使を務められています。大使になられる前の2005年から2013年にも日本に滞在され、2009年には日本大学大学院芸術学部で日本研究と映画研究の博士号を取られました。その後、人間文化研究機構国際日本文化研究センターや京都大学地域研究統合情報センターの客員教授を務められ

たり、日本で映画やテレビ番組の作成をおこなったりするなど、幅広く活躍されてこられました。

今回の訪問では、総長との間でマケドニアの大学、研究機関と北大との交流について話をされた後、センターにおいても、センター長や野町准教授との間で、今後の研究交流について話をされました。その後おこなわれた講演会では、「マケドニアの文化遺産、言語、映画」と題する講演がおこなわれました。マケドニアの歴史や現在の文化面での状況などについて、沢山のスライドを使って話をされました。また、お薦めのマケドニア映画のさわりの部分をいくつか紹介されました。短い時間ではありましたが、マケドニアについてよく知ることのできる貴重な機会になったように思いました。センターとバルカン諸国との交流は、これまでそれほど密なものではありませんでしたが、今回の講演会が今後の発展のきっかけになることを期待しております。[田畑]

◆ 2015年度「北大デー」、ゲント大学（ベルギー）にて開催される ◆

2016年2月29日および3月1日、ヨーロッパの歴史ある名門校ゲント大学にて、「北大デー」が開催されました。「北大デー」は北海道大学の国際交流の一つで、毎年ヨーロッパの大学間交流協定校とシンポジウムやワークショップなどを組織しています。2016年は日本・ベルギー友好150年ということもあり、ゲント大学との共催となりました。スラブ研究に関して、センターとゲント大学スラブ・東欧研究センターとの関係は近年特に深く、2011年には境界研究での共同研究として、ロシア・ピジン言語およびスラブ文献学研究で著名な Dieter Stern 教授を招へいし、2015年には東京で共同国際シンポジウムを開催しています。



研究報告をおこなう生熊氏

今回の「北大デー」では、スラブ研究に関する2セッションがおこなわれました。第1セッションは「東欧における境界とマージン」と題され、東欧・ロシア境界地域の言語、文学、文化人類学などの諸問題が討論されました。第2セッション「東欧へのゲートウェイ：若手研究者の研究報告」では、芸術や哲学の研究報告がおこなわれました。プログラムは以下の通りです。

## Borders and Margins in Eastern Europe

- 14.00-14.45 Go Koshino (SRC), A Subverting Perception of Tuteishiya (Local People) in Contemporary Belarusian Literature
- 14.45-15.30 Motoki Nomachi (SRC), Questions of the Gorani Ethnolect in the Context of the Disintegration of Serbo-Croatian
- 15.30-16.15 Rozita Dimova (GCSEES), Displacing Borders through Materiality and Aesthetics in Contemporary Macedonia
- 16.15-17.00 Dieter Stern (GCSEES), Informal Cross-Border Economies in the Post-Soviet Space as a Field of Linguistic Investigation



向かって左から Stern 教授、越野研究員、生熊氏

## Gateways to Eastern Europe: Young Researchers Present Their Research

- 10.00-10.45 Genichi Ikuma (Graduate School of Letters), Representations of Human Beings in Soviet Unofficial Art
- 10.45-11.30 Charlotte Bollaert (GCSEES, TRACE), Jean-Paul Sartre in Soviet Russia: Early Responses and Image Formation

2016年度の「北大デー」は2017年3月2～3日にヘルシンキでおこなわれる予定です。[野町]

### ◆ 2016年度科学研究費プロジェクト ◆

2016年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです（8月3日現在：「学振特別研究員奨励費」及び「研究成果公開促進費（学術図書）」を除く）。[事務係]

#### 基盤研究 (A)

- 宇山 智彦 比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究（2013-17年度）
- 岩下 明裕 ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築（2014-17年度）
- 田畑伸一郎 ユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）の発展モデルの比較（2015-18年度）
- 家田 修 被災者参画による原子力災害研究と市民復興モデルの構築：チェルノブイリから福島へ（2015-17年度）

#### 基盤研究 (B)

- 越野 剛 社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究：旧ソ連・中国・ベトナム（2013-16年度）
- 野町 素己 東欧革命以降のスラヴ世界におけるマイクロ文語の総合的研究（2013-16年度）
- 原 暉之 サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史（2013-16年度）
- David Wolff 中露関係の新展開：「友好」レジーム形成の総合的研究（2015-18年度）
- 仙石 学 中央アジアの移民労働によるグローカリゼーションとムスリム住民のジェンダーの変化（2016-19年度）

#### 基盤研究 (C)

- 高本 康子 近代日本の画像メディアにおける「喇嘛教」表象の研究（2012-16年度）
- 長縄 宣博 軍事と外交から見るソ連の帝国建設：カリム・ハキームフ（1892-1937）の研究（2013-16年度）
- 後藤 正憲 ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究（2014-2016）
- 井潤 裕 帝国日本における「北進論」の特質と影響：樺太と千島を例に（2014-16年度）

### 挑戦的萌芽研究

家田 修 東欧世界の成立と日本：日本・東欧関係史の再構築と新たなスラブ・ユーラシア史（2015-17年度）

野町 素己 セルビアにおけるバナト・ブルガリア語の現状および言語変化に関する研究（2015-17年度）

越野 剛 北東ユーラシアにおけるロシアと中国の文化混在の記憶と表象（2016-18年度）

### 若手研究（B）

地田 徹朗 戦後ソ連のアラル海流域環境史：人間活動と生態危機（2013-16年度）

高橋沙奈美 国際関係をとおしてみる現代ロシア教会の列聖と聖人崇敬（2016-17年度）

油本 真理 現代ロシアにおける政治体制と選挙：選挙の公正性をめぐるポリティクス（2016-18年度）

### 研究活動スタート支援

菊田 悠 中央アジアの移民労働によるグローカリゼーションとムスリム住民のジェンダーの変化（2015-16年度）

## ◆ 北大祭期間中にセンター一般公開が開催される ◆



サイエンス・トークでの菊田助教

毎年恒例行事となっているスラブ・ユーラシア地域の絵本の展示とアニメ上映をおこないました。本年度は、ウズベキスタンをフィールドとする文化人類学者2名（菊田悠・助教、宗野ふもと・非常勤研究員）がセンターにスタッフとして在籍しており、ウズベキスタンの絨毯の上に座りながら、現地で購入をした乾燥果物やピーナッツをつまみ、お茶を飲んで楽しみながら中央ユーラシアのウズベキスタンの文化を知るとい、「ウズベキスタンのお茶会」企画をおこないました。広い構内を歩いてめぐってこられた来場者の方たちに座ってのお茶会企画はたいへん好評でした。

サイエンス・トークは、ウルフ・ディビッド教授による「スラブ・ユーラシア研究センターはなぜ北大につくられたのか？：センター誕生の歴史」、菊田悠による「魅惑のコバルトブルー：ウズベキスタンのリシタン陶芸現代史」という2本立てでした。菊田助教はリシタン陶器の実物展示も組織し、パネル展示だけでなくお茶会企画とも連動させる形で、来場者の関心を惹いていました。ウルフ教授によるセンターの歴史に関する講演に対しては、センター開設（昭和30年）当時の国際情勢や国内の思想状況との関連についてなど鋭い質問が寄せられました。センターの歴史についてのパネル展示はウルフ教授による監修の下で、地田徹朗・助教が製作を担当しました。パネル及び空間のデザインは笹谷めぐみ・研究支援推進員によるものです。

パネル展示とサイエンス・トークの連動という形式は踏襲しておりますが、来場者の皆さまに楽しんでいただける新たなコンテンツを編み出すべく、助教を中心としたスタッフ一同、毎

毎年の恒例行事となっているスラブ・ユーラシア研究センターの一般公開が、第58回北大祭期間中の6月4日（土）にセンター4階ラウンジを会場としておこなわれました。朝から曇り空で天候不安もある中でしたが、327名もの多くの方にご来場いただきました。

一般公開では、センタースタッフによる最新の研究成果に関するパネル展示とサイエンス・トークをおこない、また、毎年恒例となっ

年知恵をしぼっております。本年度も、本行事は「6 研究所・センター 合同一般公開」の枠組の中でおこなわれました。昨年度までは、合同一般公開の「シールラリー」の景品目的のみの来場者も多かったのですが、本年度は「お茶会」企画のおかげで足を止めてセンターの展示・研究内容に興味を持ってくれる来場者の方も増えたように思います。予算が限られている中で「手弁当」状態の一般公開ではありますが、センターの社会連携活動の一環として、そして、センターの活動に関する貴重な広報の機会であることに疑いはありません。ロジ面でご活躍いただいたスタッフの皆さまに感謝いたしますと共に、センターの活動に興味をもってご来場いただいた市民の皆さまに心から御礼を申し上げます。[地田]



民族衣装を着たスタッフがお茶とお菓子でおもてなし

◆ **Border Regions in Transition (BRIT) 第 15 回大会の開催** ◆

境界研究の主要な国際会議の一つである Border Regions in Transition (BRIT) の第 15 回大会が、南デンマーク大学の主催でドイツのハンブルグとデンマークのセナボーで 5 月 17 日から 20 日まで開催されました。かつて、センターが中心となった GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」が第 13 回福岡／釜山大会を主催したことがあります。今回、境界研究ユニット (UBRJ) からは、岩下明裕、デ



報告するウルフ教授

イビッド・ウルフ、地田徹朗の 3 名が参加しました。また、GCOE 学術研究員として過去にセンターに勤務していた花松泰倫 (九州大) も参加しています。BRIT XV は「都市・国家・境界：ローカルからグローバルまで」と題され、ツインシティーの問題など、欧州の都市型の境界地域の実態や越境地域協力 (及びその構築) を扱った報告が数多く見られました。岩下と花松は稚内と対馬での国境観光の取り組みについて報告し、ウルフは「東洋のバリ」と称された境域都市としてのハルビンの歴史に焦点を当てた報告をおこないました。地田は、中央アジア・アラル海災害についてボーダーとスケールの視点から報告をしました。恒例の国境越えエクスカージョンでは、美しい北ドイツ／南デンマークの自然を堪能しただけでなく、ドイツ・デンマークの国境地域での協力関係について知るよき機会となりました。物価差ゆえに、デンマーク側からドイツ側国境の街フレンスブルグに買い物目的で人々が押し寄せる様子は非常に印象的でした。次回の第 16 回大会は、2018 年にナイジェリアのイバダン大学で開催されます。ベナンとの越境ツアーも予定されているとのこと。[地田]

◆ UBRJ：北大総合博物館にて「国境観光」第二期展示がオープン ◆



「国境観光」第二期展示

耐震工事に伴い、北大総合博物館は一年半ほど休館しておりましたが、7月26日（火）に展示内容も新たにリニューアルオープンいたしました。休館前と同じ2階のスペースにスラブ・ユーラシア研究センターにもブースが割り当てられ、境界研究ユニット（UBRJ）が主体となって、「国境観光」展示の第二弾を組織しました。日本の「国境観光」生誕の地たる対馬に関する展示で

は、韓国への「ゲートウェイ」としての上対馬をフィーチャー。昨年度より実施されている稚内・サハリン国境観光についての展示では、サハリンにおける日本統治時代の歴史遺構に焦点が当てられています。そして、メインコンテンツは、稚内市在住の写真家、斉藤マサヨシ氏による「サハリン（樺太）国境紀行」写真展示です。サハリンの自然景観を軸とする美しい写真の数々をご堪能ください。そして、GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」時代から博物館展示に携わり、「国境観光」第一期展示の展示デザインも行った、故・宇佐見祥子の手による「北辺の観光地・樺太」と題された戦前の樺太観光についてのパネルは今回も引き続きご覧になることができます。昨年10月に闘病の末亡くなられた宇佐見さんのメモリアル展示も組織しました。

展示コンテンツは岩下明裕（センター／UBRJ ユニットリーダー）が統括し、デザインをセンターの研究支援推進員である笹谷めぐみが担当。展示ブースのレイアウトは総合博物館名誉教授（元館長）の松枝大治先生をお願いをいたしました。

総合博物館は月曜日を除く毎日10時～17時まで開館しております。北大にお立ち寄りの際にはぜひ総合博物館にも足をお運びいただければと思います。[地田]

◆ 2016年度鈴川・中村基金奨励研究員決まる ◆

2016年度鈴川・中村基金奨励研究員は以下の6名の方に決定しました（滞在日程順）。[家田]

採用決定者・所属	テーマ	予定滞在期間	ホスト教員
細川 瑠璃 東京大学大学院	パーヴェル・フロレンスキイの手紙・詩・回想における視覚的表象の分析	2016年7月14日 ～8月2日	越野
醍醐 龍馬 大阪大学大学院	岩倉使節団外遊期の日露関係	2016年8月19日 ～9月2日	岩下
山脇 大 京都大学大学院	ロシアにおける天然資源開発と環境政策	2016年8月22～ 31日	田畑
齋須 直人 京都大学大学院	過去40年間の日本における『白痴』：研究書・翻訳・日本文学への影響	2016年10月11～ 25日	越野
中澤 拓哉 東京大学大学院	社会主義ユーゴスラヴィアにおける民族史叙述とナショナリズム：モンテネグロを事例として（1960-1980年代）	2016年11月21日 ～12月2日	家田
門間 卓也 東京大学大学院	社会主義ユーゴスラヴィアにおける対ソ連政策と民族間関係の再規定について	2017年1月30日 ～2月10日	仙石

## ◆ 研究会活動 ◆

- ニュース 145 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]
- 5月17日 ロシアビジネスセミナー 2016「ロシア経済の展望とプーチン政権の極東新政策：日本・北海道の対応を探る」**田畑伸一郎**（センター）「2015年のロシア経済と2016年の展望」；**齋藤大輔**（ロシア NIS 貿易会経済研究所）「プーチン政権によるロシア極東新政策」
- 5月19日 **Evžen Kočenda**（カレル大、チェコ）“Trade in Parts and Components across Europe”（SRC セミナー）
- 5月28日 第5回古儀式派研究会研究集会 **塚田力**（通訳業）「1960年代のブラジルにおけるロシア古儀式派」；**豊川浩一**（明治大）「18世紀のロシアにおける民衆運動と古儀式派：プガチョーフ叛乱を中心に」；**Svetlana Vasil'eva**（ブリヤート国立大、ロシア）“Сохранение, трансляция духовного и материального наследия старообрядцев: семейских в условиях трансформации российского общества”；**Sergei Taranets**（ウクライナ科学アカデミー）“Старообрядчество в социокультурном пространстве Российской империи конца XVII - начала XX века”
- 5月31日 古儀式派研究会北大研究会 **阪本秀昭**（天理大）「ロシア古儀式派教徒の禁欲主義と勤労原理に関する考察：ユダヤ教徒との比較から」；**Svetlana Vasil'eva**（ブリヤート国立大、ロシア）“Государственная модернизация старообрядческих институтов Байкальского региона в имперский, советский и постсоветский периоды”；**Sergei Taranets**（ウクライナ科学アカデミー）“Старообрядчество на территории Украины в конце XVII - начале XX века”
- 6月7日 **松崎英也**（上智大）「クリミア・タタール人の帰還とクリミア自治共和国の形成：ソ連解体期（1989-1991）を中心に」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 6月8日 **Dililar Usmanova**（カザン大、ロシア）「20世紀カザン大学の古文獻収集活動とカザンの東洋語文献学の伝統（ロシア語）」（SRC セミナー）
- 6月10日 **岡部芳彦**（神戸学院大）「体験的ウクライナ論：人々との交流から見る政治・社会の変化」（北海道スラブ研究会）
- 6月22日 **Jason Wittenberg**（カリフォルニア大、米国）“Contemporary Political Trends and Historical Legacies: Eastern Europe, Russia and Turkey”（SRC セミナー）
- 6月23日 UBRJ/NIHU セミナー **朱永浩**（福島大）「中露国境地域の経済交流実態をみる：国境の町・緩芬河のいま」
- 6月24日 第17回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 **田畑伸一郎**（センター）「縮小するロシア経済：回復はあるのか？」
- 7月1日 **宗野ふもと**（センター）「ウズベキスタンのパズールと暮らし」；**油本真理**（センター）「政権危機をどう乗り越えるか：ロシアにおける2011年下院選挙と『全ロシア人民戦線』」（北海道スラブ研究会）
- 7月2日 **海野典子**（東京大・院）「中国のムスリムとユーラシアの近代：華北地域における『民族』『宗教』と日常生活1906-1918」；**アセリ・ビタバロヴァ**（北大文・院）「中国における中央アジア研究：新研究分野の開拓と知識人の認識をめぐって」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 7月11日 **Daria Gritsenko**（ヘルシンキ大、フィンランド）“Unveiling Russian Media and Foreign Policy Perceptions of the Arctic”（SRC セミナー）
- 7月19日 **細川瑠璃**（東京大・院）「フロレンスキイの宇宙論：無限と不連続の視覚的表象として」（鈴木中村基金奨励研究員セミナー）
- 7月20日 マケドニア大使講演会 **Andrijana Cvetkovikj**（駐日マケドニア共和国大使）「マケドニアの文化遺産、言語、映画（英語）」
- 7月28日 「ユーラシア地域大国における聖地の比較研究」研究会 **河合洋尚**（国立民族学博物館）「聖地言説と信仰実践：中国梅県の呂帝廟をめぐる『聖地』の複数性」；**小林宏至**（山口大）「神様の里帰り：客家地域における閩南文化」；**井田克征**（金沢大）「聖地研究における古典と現実」
- 7月29日 ユーラシア表象研究会 **細川瑠璃**（東京大・院）「フロレンスキイにおける言語と身体」
- 7月30日 共同利用・共同研究拠点研究報告会 **井上貴子**（大東文化大）「ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究」；**長縄宣博**（センター）「ロシアにおける出版資本主義と帝国秩序との相互補完性に関する研究」；**松戸清裕**（北海学園大）「ソ連市民の消費生活に関する学際的研究」；**三谷恵子**（東京大）「中世スラヴ語テキストの多元的研究：スラヴ文献言語学の新たなアプローチをめざして」
- 第27回「一緒に考えましょう講座」 **佐藤八郎**（福島県飯舘村村会）「原発被災地、飯舘村のいま」

## 第6回国際ポーランド学会議でパネルを組織して

野町素己（センター）



報告をするミフナ氏、向かって左からヴィヘルケヴィッチ氏、筆者、ロランド氏

2016年6月22日～25日、ポーランドのカトヴィツェにて上記国際会議が開催された。本国際会議は、もともとは在外ポーランド学会議に端を発するもので、外国と本国のポーランド人文学者の交流の強化を目的に設立され、その第1回は1998年ワルシャワで開催された。主に文学、言語学、映画、演劇、語学教育の研究者が集まる国際会議で、これまでグダンスク（2001年）、ポズナニ（2006年）、クラクフ（2008年）、オポレ（2012年）と続いている。次回は2020年にヴロツワフで開催される予定である。

今回の会議は報告者のべ350人程度の規模で、9つの基調講演、9つのパネルセッション、15種類のテーマ別セッション合計45セッションが行われた。基調講演とパネルセッションは組織者側から招へいで、後者はテーマが組織者側から概ね指定されていた。テーマ別セッションは個人応募によるものであった。会議自体がそもそも外国人、あるいは在外ポーランド人研究者向けということもあり、著名な外国人研究者が比較的多く参加していたのに対し、ポーランド本国の研究者はというと、重要な研究者がそろって参加していたというわけではなかったと思う。なお、日本からは、まさに著名な外国人ポーランド文学研究者として活躍している関口時正氏と加藤有子氏が参加され、関口氏はプログラム委員も務めておられた。国際会議の詳細およびプログラムについては、以下のリンクを参照されたい。

<http://kongrespolonistow2016.us.edu.pl/index.php>

近年、ポーランドは自国の伝統や文化の普及やそれらの研究発展に並々ならぬ力を注いでいる。クラクフにある書物研究所（The Book Institute）が組織するポーランド文学翻訳者会議もそうだが、今回の国際会議も国を挙げた支援体制が敷かれ、私の聞いた話が正しければ、報告者全員の旅費・滞在費が組織者側から支弁されたようである。もちろん国際会議組織者の粘り強い予算獲得への努力あってのことだが、東欧革命四半世紀を経てポーランドがいかに経済的に豊かな国になったかをも示しているように思われる。

今回の国際会議は、国際ポーランド学協会およびシロンスク大学とその関係者が中心になって組織しており、ポーランド学士院の文学部門、言語学部門、文化研究部門が共同組織者として名前を連ねている。その中心になっていたのは、ヨランタ・タンボル氏（シロンスク大学）であった。タンボル氏は、ポーランド語学の専門家、音声学・音韻論や社会言語学で数多くの業績を挙げておられ、特にシロンスク地方の言語状況に関する研究で著名である。タンボル氏は、ここ数年来の私の共同研究者で、2014年にはSRCで特別講義をされるなど比較的近しい関係にあることもあり、恐らくそれが理由で、ドイツのスラヴ学者ゲルト・ヘンチェル氏（オルデンブルク大学）とともに社会言語学のパネルの組織を依頼された。ヘンチェル氏とタンボル氏と数回メールでの打合せをし、パネル「地域言語と少数話者言語：政治的意味合い—成文化—構造の諸相」を提案することになった。このテーマは、副題にもあるように、

政治的な側面があるため外国人の私はポーランド人の前で話すことに多少及び腰になったが、ヘンチェル氏もまさに同じことを言っておられた。ヘンチェル氏の場合は、ドイツ人がシロンスクについて論じるという理由もあるだろう。

パネルは、ポーランドを中心とした少数話者言語研究で著名な社会言語学者トマシュ・ヴィヘルキェヴィッチ氏（アダム・ミツキェヴィチ大学）、ルシン語を専門とする文化人類学者エヴァ・ミフナ氏（ヤギェウォ大学）というポーランド人研究者2名に、ソルブ語研究（但し今回の発表内容は違う）で著名なロランド・マルティ氏（ザールラント大学）および組織者2名を加えた計5名から構成され、私を除き、かなり充実した陣容となった。各報告題目は以下の通りである。

ヴィヘルキェヴィッチ：「言語政策および言語生態学の視点によるポーランドの地方言語と少数話者言語」

ミフナ：「言語標準化から言語再生へ・ウেমコ語の解放」

マルティ：「スイスにおけるレト・ロマンス語とドイツ語」

野野：「言語解放理論に照らしたカシュブ語の言語状況とその動態」

ヘンチェル：「シロンスク・方言・言語？」

後で述べる「シロンスク語」の活動家もセッションには来ていたが、我々の予想に反して、討論は政治色を帯びない、実に穏便で学術的に充実したものであった。そもそもテーマ自体がポーランド学の王道ではないこともあり、むしろ普通のポーランド学者があまり知らないことについて、彼らが興味を持って聴いたというのが本当のところであろうか。各報告にそれぞれ質問・コメントが出たが、マルティ氏の他地域の事例研究は特に注目を集めていた。ポーランドの言語状況および可能な言語共存のモデルを考える上で、レト・ロマンス語の方言多様性と言語標準化や書記法の問題に関わる事例研究は示唆に富み、この人選とテーマの選定を行ったヘンチェル氏はさすがと言わざるを得ない。

様々な事情から関心のある研究報告をすべて聞くことはできなかったのだが、その代わりにこの国際会議期間中に、カトヴィツェ郊外で行われた「シロンスク語標準化委員会」の会議に参加することができた。これにはパネリスト全員および同国際会議に参加していたカシュブ文学・文化研究者が招待されたのだが、その議論の様子を見ることができたのは私にとって貴重な経験となった。「シロンスク語」は、現在形成されつつある言語で、その地位を巡って大きな討論が続いている。2016年現在、法律で認められた公的な地位は得ていないが、「委員会」は将来的にはカシュブ語と同じ「地域言語」の地位を目指している。同時に、書き言葉の標準化を行うために、現地の活動家と専門家が共同して検討作業を行っている。また、カシュブやウেমコといった他の少数話者言語の活動家との結束も日々強くなってきているようである。

私が参加した時は、シロンスク研究で著名なアルトゥル・チェサク氏（ヤギェウォ大学）



「シロンスク語」を巡る会議のようす  
（写真はユゼフ・ポロヴォウ氏より）

が会議を取り仕切っており、会議のメンバーからシロンスクの言語状況に関する全般的な報告があったほかに、シロンスク以外のポーランドの少数話者言語を巡る法律や言語標準化の問題の事例紹介、および「シロンスク語」が抱える諸問題への応用の可能性についても討論がなされた。ヘンチェル氏は低地ドイツ語の言語状況と現地人の言語態度などについて意見を求められていた。私は日本人の視点から意見を求められ、日本の少数話者言語の法的な位置づけや保護状況、また日本語の方言差や方言の社会的な位置づけ、言語態度などを簡潔に紹介した。これは私が日本人だからというだけでなく、彼らにとって日本語に見られる漢語と日本語の併存システムが、「シロンスク語」本来の語彙と外来語（特にドイツ語やポーランド語）との併用を考える際に参考になるかららしい。実際、2010年に刊行されたミロスワフ・スィニャヴァ氏による「子供向けではない初等読本あるいはシロンスク語教程」に日本語の大和言葉と漢語の関係に関する記述が見られる。

印象的だったのは、会議のメンバーであるヤヌシュ・ムズィチシン氏が会議の最後に「ポーランド人を含めて、一般的に『シロンスク語』という言葉だけで首をかしげる人がほとんどだが、今回の客人たちは誰一人疑問を持たず、すぐに議論に積極的に参加した。これは初めての経験だ」と述べたことである。新言語の立ち上げの活動について、現地を知らない研究者の目には、活発な出版状況などから順調に行われているものと映るかもしれない。しかし言語が直面している現実と理想の乖離は、思うよりもはるかに大きい。ポーランドで「シロンスク語」が公的地位を得ること、そしてなにより一般に認知されるにはいましばらく時間がかかりそうであるし、果たして標準化されたとしても、それが方言の担い手たちに受け入れられて普及するかはまた別の問題だ。そうした過渡期的状況を整理するという意味でも、会議の参加は意義深く、私の今後の研究へのひとつの指針を示されたように思う。

## 学 界 短 信

### ◆ 学会カレンダー ◆

- 2016年9月8-10日 第14回欧州比較経済体制学会 於レーゲンスブルク（ドイツ）  
<http://www.eacesconference.eu/>
- 9月24-25日 第7回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会 於華東師範大学（上海）  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/applications/Call%20for%20Papers%20EAC%202016.pdf>
- 10月1-2日 日本政治学会研究大会 於立命館大学 <http://www.jpasa-web.org/2015/10/2016-1.html>
- 10月8-9日 ロシア史研究会 2016年度大会 於東北大学川内南キャンパス  
[http://www.gakkai.ac/russian\\_history/](http://www.gakkai.ac/russian_history/) 大会 /
- 10月14-16日 日本国際政治学会 2016年度研究大会（60周年記念大会） 於幕張メッセ <http://jair.or.jp/>
- 10月22-23日 第66回日本ロシア文学会定例総会・研究発表会 於北海道大学 <http://jaar.jpn.org>
- 10月29-30日 ロシア・東欧学会 2016年度研究大会 於京都女子大学  
<http://www.gakkai.ac/roto/>
- 11月3-6日 CESS（中央ユーラシア研究学会）第17回年次大会 於プリンストン大学  
<http://www.centraleurasia.org/annual-conf>
- 11月5日 内陸アジア史学会 2016年度大会 於駒澤大学 <http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>
- 11月5-6日 地域研究コンソーシアム年次集会 於京都大学 <http://www.jcas.jp/index.html>
- 11月12日 比較経済体制学会第14回秋期大会 於大阪経済法科大学  
<http://www.keiho-u.ac.jp/jaces2016autumn/>
- 11月17-20日 ASEES（スラブ東欧ユーラシア学会）第48回年次大会 於ワシントン DC  
<http://www.aseees.org/convention>
- 12月8-9日 スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム [編集部]

# 図書室だより

## ◆ 皓星社の雑誌索引データベース事業に協力 ◆

昨年末、センター図書室は、国立国会図書館の『雑誌記事索引』を拡張して、戦前を含めた日本の雑誌（一部、新聞も含む）記事索引のオンラインデータベース『ざっさくプラス』を提供する皓星社と協議し、ここに欠けているデータの一部について、作成を支援することとなりました。

その手始めとして、1901年から1921年まで北海道庁が刊行していた雑誌『殖民公報』の総目次データ（全123号、7,147件）を作成しましたのでお知らせします。

隔月刊のこの雑誌には、北海道の殖民状況の他、農林漁業、鉱工業、商業、貿易、金融、交通運輸、土木から、教育やアイヌの状況までを扱い、当時の北海道を知るうえでの基礎的なデータの宝庫と思われます。当時は、行政上北海道の一部であった千島はもちろん、樺太、沿海地方の状況についても、多くの誌面を割いています。この雑誌は、かつて名著編纂会（1985年）および北海道出版企画センター（1988年）から復刻版が出たことがあります。今回作成のデータには、北海道出版企画センターの復刻版での収録巻を付記しました。

このデータは、今後、『ざっさくプラス』を通じてその契約者に提供されるほか、個人でご入用の方には別途頒布しますので、図書室にご一報ください。[兔内]

## 誰が何をどこで

2015年度（4～3月）の専任研究員・助教・客員教授・非常勤研究員・博士研究員の研究成果、研究余滴のアンケート調査（提出は任意）を以下のようにまとめました。[五十音順] [大須賀]

**家田修** ㊦ 1 学術論文 ▼ *Catastrophe and Reconstruction from a Regional and Humanitarian Perspective: Chernobyl, Akja, and Fukushima* (Chatthip Nartsupha and Chris Baker, eds., *In the Light of History*, 123-144, Bangkok, 2015) ▼ *What Do the National Censuses of 2001 and 2011 Say about Ethnic Minorities? An Introduction to a Study on the Slovaks in Hungary* (Osamu Ieda, Susumu Nagayo, eds., *Transboundary Symbiosis over the Danube II: Road to a Multidimensional Ethnic Symbiosis in the Mid-Danube Region* [Slavic Eurasian Studies No. 29], 91-111, SRC, 2015) ▼ (セルヒー・チョーリーと共著) 東欧スラブ地域から災害復興のレジリエンスを考える (川喜田敦子、西芳実 編著『歴史としてのレジリエンス』[災害対応の地域研究 4] 301-341, 京都大学出版会, 2016) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 東欧の脱社会主義化 (南塚信吾、秋田茂、高澤紀恵共編『新しく学ぶ西洋の歴史: アジアから考える』360-362, ミネルヴァ書房, 2016) ㊦ 3 著書 ▼ (Susumu Nagayo と共編著) *Transboundary Symbiosis over the Danube II: Road to a Multidimensional Ethnic Symbiosis in the Mid-Danube Region* [Slavic Eurasian Studies No. 29], 195 (SRC, 2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ *A Comparison of Chernobyl and Fukushima from a Viewpoint of the Local Residents, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES)*, 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.7) ▼ *Post-Catastrophe Humanitarian Reconstruction: Lessons from Chernobyl and Fukushima, Seventy Years after Hiroshima: Conceptualizing Nuclear Issues in Global Context*, アルバータ大学, エドモントン (2015.9.19) ▼ *Válságkezelés Magyarországon és Japánban: Létezik-e Magyar model? [ハンガリーと日本の危機管理: ハンガリーモデルについて]*, *Válságkezelés Kutató Csoport*, エトヴェシュ・ローランド大学, ブダペスト (2015.11.19) ▼ *Social Resilience after Disasters in Chernobyl, Akja and Fukushima from a Viewpoint of Affected Residents*, スラブ東欧研究所, ロンドン大学 (2016.3.7)

**岩下明裕** ㊦ 1 学術論文 ▼ *ボーダースタディーズからみた世界と秩序: 混迷する社会の可視化を求めて* (村上勇介、帯谷知可編著『融解と再創造の世界秩序』1-20, 青弓社, 2016) ▼ *Thaws, Freezes, and Flows? The Realities of Sino-Russian Relations on the Borderlands*, *Senri Ethnological Studies*, 92:11-23 (2016) ▼ (E.

Boyle と) State Borders in Asia (S. Sevastianov, J. Laine and A. Kireev, eds., *Introduction to Border Studies*, 226-244, Far Eastern Federal University, 2016) ㊦ 3 著書 ▼ *Japan's Border Issues: Pitfalls and Prospects*, 156 (London: Routledge, 2015) ㊦ 『入門 国境学：領土、主権、イデオロギー』 244 (中公新書, 2016) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Conflicts and Co-existent Lives on the Border in Northeast Asia: Featuring the Case of Japan's Borderlands, シンハン大学, 韓国 (2015.10.7-8) ▼ From "Territorial Issues" to the "Issue of Territoriality": How Do We Debunk the Myth of Sovereignty?, 九州大学 (2015.11.23) ▼ A New Era of Geopolitics: Responding to the China-Russian Challenge, ブルッキングス研究所, 米国 (2016.3.24)

宇山智彦 ㊦ 1 学術論文 ▼ The Contribution of Central Eurasian Studies to Russian and (Post-)Soviet Studies and Beyond, *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*, 16(2):331-344 (2015) ▼ 中央アジア諸国からみた国際環境の変化と対応：ロシアの政治的・軍事的影響力と中国の経済進出『国際問題』 647:16-27 (2015) ▼ Repression of Kazakh Intellectuals as a Sign of Weakness of Russian Imperial Rule: The Paradoxical Impact of Governor A. N. Troinitskii on the Kazakh National Movement, *Cahiers du Monde russe*, 56(4):681-703 (2016) ▼ 「ユーラシア近代帝国論へのいざない」『周縁から帝国への『招待』・抵抗・適応：中央アジアの場合』「帝国・地域大国・小国」(宇山智彦編『ユーラシア近代帝国と現代世界』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 4] 41-20; 121-144; 237-256, ミネルヴァ書房, 2016) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ (岩崎一郎と共著) 近現代：中央アジア：19～21世紀 (水島司、加藤博、久保亨、島田竜登編『アジア経済史研究入門』 246-262, 344-354, 名古屋大学出版会, 2015) ▼ 新「グレートゲーム」時代の中央アジア：その主体性と客体性『外交』 34:13-20 (2015)

▼ 比較帝国論と比較政治学『日本比較政治学会ニューズレター』 36:12-13 (2016) ▼ 遊牧・イスラーム・ソ連の響き：カザフスタン (岩波書店辞典編集部編『世界の名前』 99-101, 岩波新書, 2016) ㊦ 3 著書 ▼ (編著)『ユーラシア近代帝国と現代世界』[シリーズ・ユーラシア地域大国論 4] 280 (ミネルヴァ書房, 2016.2) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 帝國的プロセスとしてのロシア・ソ連史：比較と関係性の視点から, ソビエト史研究会 2015 年度年次研究大会, 専修大学サテライトキャンパス (2015.6.13)

▼ Understanding the Kazakh Autonomy of the Alash Orda Multidisciplinarily: Enlightenment, Post-Imperial Citizenship, and International Contexts, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.4) ▼ Perspectives of Japan-China Cooperation in Central Asia, 2015 China Xinjiang Development Forum, 新疆迎賓館, ウルムチ (2015.8.18)

▼ Transborder Cultural and Historical Relations between Xinjiang and the Central Asian Countries, CASS Forum: The Cooperation of the Neighboring Area with the Perspective of Chinese "One Belt One Road" Strategy, 中国社会科学院, 北京 (2015.8.21) ▼ 権威主義ロシアの「帝国」化の賭け：旧ソ連諸国統合・反米主義・対中接近, 京都大学地域研究統合情報センターシンポジウム「BRICs 諸国のいま：2010 年代世界の位相」, あすか会議室東京日本橋会議室 (2015.10.10) ▼ 1916 年反乱は革命の前触れだったのか：大戦期中央アジア社会の活発化と断裂, ロシア史研究会 2015 年大会共通論題, 早稲田大学 (2015.10.11) ▼ 新しい「帝国」時代の中央アジア国際関係, 中央ユーラシア調査会公開シンポジウム「ユーラシアにおける中露の角逐と中央アジア」, 東海大学校友会館 (2016.1.22) ▼ Ukraine, Kazakhstan, and China's "One Belt, One Road" Project, 9th Europe-Ukraine Forum, Andel's Hotel Łódź, Poland (2016.1.25)

ウルフ・ディビッド ㊦ 1 学術論文 ▼ Returning from Harbin: Northeast Asia, 1945 (S. Paichadze, P. Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto/Sakhalin*, 101-116, London: Routledge, 2015) ▼ (共著) Aufbruch, Dynamik, Internationalisierung: Slawisch-Eurasische Area-Studies in Japan: Ein Überblick, *Osteuropa*, 5-6:175-192 (2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Riutin vs. Khorvat: 1917 at Harbin, 47th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Philadelphia (2015.11) ▼ The SRC and the Rockefeller Foundation, Winter International Symposium of the SRC "Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60," SRC (2015.12.10)

金山浩司 ㊦ 1 学術論文 ▼ 実践的生産過程での媒介としての技術：1940 年代初頭における相川春喜 (1909-1953) の理論的諸著作『科学史研究』 273:17-31 (2015.4) ▼ 「ソ連を代表する物理学者の交代劇：アブラム・ヨッフエからセルゲイ・ヴァヴィーロフへ」『大テロルはソ連邦科学アカデミーをどう変えたか：常任書記の解任を手がかりに』(市川浩編『科学の参謀本部：ロシア／ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究』 157-184, 199-214, 北海道大学出版会, 2016.2) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ 辛島理人著『帝国日本のアジア研究：総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』(明石書店, 2015)『境界研究』 6:173-175 (2016.3) (4) 翻訳 ▼ 「エディントンの夢、その他の異端」を担当 (ヘリガ・カーオ (岡本拓司監訳)『20 世紀物理学史』 284-299, 名古屋大学出版会, 2015.6) ▼ アレクセイ・コジェフニコフ著「ソヴィエト政体を共同制作した科学」, コンスタンチン・トミーリン著「セルゲイ・ヴァヴィーロフと 1930 年代ソ連邦科学アカデミーの組織的転換」(市川浩編『科学の参謀本部：ロシア／ソ連邦科学ア

カデミーに関する国際共同研究』125-156, 185-198, 北海道大学出版会, 2016.2) ㊦ 5 学会報告・学術講演

▼ The Great Terror and the Soviet Academy of Sciences, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.7) ▼ Admiring the Atomic Bomb but Rejecting Nuclear Power? The Life and Thought of Physicist TAKETANI Mitsuo (1911-2000), 70 Years after Hiroshima, PTJC Conference, University of Alberta, Canada (2015.9.18)

菊田悠 ㊦ 1 学術論文 ▼ Remittances, Rituals and Reconsidering Women's Norms in Mahallas: Emigrant Labour and Its Social Effects in Ferghana Valley, *Central Asian Survey*, 35(1):91-104 (2016)

木村護郎クリストフ ㊦ 1 学術論文 ▼ The Role of Esperanto in Interlinguistic Geostrategies (La rolo de Esperanto en interlingvaj geostrategioj) (Wayne Finke, Hikaru Kitabayashi, eds., *Multilingual Perspectives in Geolinguistics*, 153-160, Raleigh (North Carolina): Lulu Press, 2015) ▼ 障害学的言語権論の展望と課題『社会言語学』15:1-18 (2015) ▼ キリスト教会はなぜ、そしてどのように環境問題に関わろうとするのか：ドイツの事例から『上智ヨーロッパ研究』8:43-59 (2016) ▼ Wuznam nałożowania serbszciny w cyrkwi za jeje zachowanie: Příkladowa studija z katolskeje wosady, *Lětopis* 63(1):56-68 (2016)

㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 「Kio vivtenas minoritatan lingvon?: la soraba ekzemplo」 「Что поддерживает язык меньшинства?: лужицкий пример」 「何が少数言語を維持させるのか? : ソルブ語の場合」 『日本ドゥンガン研究会報』8:115-119, 120-125, 126-129 (2015)

(1) 総説・解説・評論等 ▼ 研究ノート等 ▼ 相手言語の相互使用という可能性：ドイツ語圏境界地域での議論と実践から『上智大学国際言語情報研究所年次報告 2014 年度』37-40 (2015) (3) 書評 ▼ Erzsébet Bárat, Patrick Studer and Jiri Nekvapil, eds., *Ideological Conceptualizations of Language: Discourses of Linguistic Diversity* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2013) *Linguistica Pragensia*, 2:179-183 (2015) (5) その他 ▼ “Deteritoriigo” ĉe la german-pola landlima regiono kaj ĝia signifo por la malplimulta soraba lingvo: el vidpunkto de lingva pejzaĝo, *Etnismo*, 96:4-9 (2015) ▼ 日独のエネルギー問題に関する相互誤解について『ゲルマニア』18:18-22 (2015) ㊦ 4 その他業績 (辞典項目) ▼ 「アイデンティティ」「共通語」「言語イデオロギー」「言語権」「言語使用領域」「言語政策」「参与観察」「社会言語学」「標準語」(斎藤純男、田口善久、西村義樹編『明解言語学辞典』1, 48, 63, 64, 66, 66-67, 101, 108-109, 19, 三省堂, 2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演

▼ Communication Management at the German-Polish Border, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.6)

▼ The Researcher as Part of Language Management Processes: A Case Study on a Research Project on European Integration, Fourth International Language Management Symposium, 上智大学 (2015.9.26)

越野剛 ㊦ 1 学術論文 ▼ Sharing Writers for a Small Nation: Belarusian-Jewish-Russian Writer Grigory Reles (Abe Kenichi, ed., *Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames* [Slavic Eurasian Studies No. 30], 117-127, SRC, 2016.3) ▼ チェルノブイリ原発事故と記憶の枠組み：ベラルーシを中心に(川喜田敦子、西芳実編『歴史としてのレジリエンス』281-300, 京都大学学術出版会, 2016) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ ベラルーシ文学：土地の人間(トウテイシヤ)の曖昧なアイデンティティ(奥彩子、西成彦、沼野充義編『東欧の想像力：現代東欧文学ガイド』257-259, 松籟社, 2016) ▼ 名字と語尾ナショナリズム：ベラルーシ(岩波書店辞典編集部編『世界の名前』81-83, 岩波新書, 2016) ㊦ 5 学会報告・学術講演

▼ The Image of German Soldiers and of Belarusian Collaborators in Belarusian-Soviet War Films, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.4) ▼ The Island of Sakhalin-Karafuto in Russian and Japanese Literature during the Interwar Period, Western Conference of the Association of Asian Studiers, University of Utah (2015.10.9) ▼ ベラルーシの中のポーランド：作家ヤン・バルシュチェフスキを中心に, フォーラム・ポーランド会議「ポーランドとその隣人たち」第2回, 青山学院アスタジオホール (2015.12.12) ▼ Girls' Albums and their Handwritten Novels as Soviet "School Folklore" Material, The Joint Symposium by IREES and SRC: "Russian Culture: Daily Life and Festivity," Seoul National University (2015.12.19) ▼ A Subverting Perception of *Tuteishiya* [Local People] in Contemporary Belarusian Literature, Hokkaido University - Ghent University Joint Conference "Connecting Japan and Belgium," Ghent University, Belgium (2016.2.29)

後藤正憲 ㊦ 1 学術論文 ▼ モノと場所の領域化：チュヴァシの在来信仰における空間の位相『北方人文研究』9:39-57 (2016) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ 松井康浩著『スターリニズムの経験：市民の手紙・日記・回想録から』(岩波書店, 2014) 『ロシア語ロシア文学研究』47:303-308 (2015)

㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Entrepreneurial Support and Local Community around Natural Resources Development in Arctic Russia, Arctic Science Summit Week, ISAR-4, 富山国際会議場 (2015.4.28) ▼ Post-Socialist Entrepreneurship in Rural Chuvash in Russia, 9th World Congress of ICCEES, 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.8)

㊦ 1 学術論文 ▼ モノと場所の領域化：チュヴァシの在来信仰における空間の位相『北方人文研究』9:39-57 (2016) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ 松井康浩著『スターリニズムの経験：市民の手紙・日記・回想録から』(岩波書店, 2014) 『ロシア語ロシア文学研究』47:303-308 (2015)

㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Entrepreneurial Support and Local Community around Natural Resources Development in Arctic Russia, Arctic Science Summit Week, ISAR-4, 富山国際会議場 (2015.4.28) ▼ Post-Socialist Entrepreneurship in Rural Chuvash in Russia, 9th World Congress of ICCEES, 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.8)

**澤田和彦** ㊦ 1 学術論文 ▼Bronislaw Piłsudski and the Osaburō Incident (Maria Kurpaska et al., eds., *Thesaurus gentium & linguarum a festschrift to honour Professor Alfred F. Majewicz*, 317-326, Poznań, 2016) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼И.А. Гончаров, *Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. Том 10: Материалы цензурской деятельности* (СПб.: «Наука», 2014) 『ロシア語ロシア文学研究』47:270-275 (2015) (5) その他 ▼〈ロシアのラフカディオ・ハーン〉: ミハイル・グリゴリエフの生涯と翻訳活動『20世紀前半の在外ロシア文化研究』[平成25-27年度科学研究費補助金 基盤研究(B) (課題番号: 25284060) 研究成果報告書] 69-94 (2016) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼早稲田と木村先生と『オネーギン』, 日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会共同企画「木村彰一先生生誕百周年記念シンポジウム」, 東京大学 (2015.6.6) ▼Russian Émigrés in Japan, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.5) ▼ミハイル・グリゴリエフと満鉄のロシア語出版物, 日本ロシア文学会第65回定例総会・研究発表会のパネル「在外ロシア文化と同時代の世界」, 埼玉大学 (2015.11.7)

**仙石学** ㊦ 1 学術論文 ▼動揺するヨーロッパ: 中東欧諸国はどこに活路を求めるのか? (村上勇介, 帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』[関連地域研究2] 74-93, 青弓社, 2016) ▼ポスト社会主義ポーランドの福祉レジーム (新川敏光編『福祉レジーム』[福祉+αシリーズ第8巻] 181-191, ミネルヴァ書房, 2015) ㊦ 4 その他業績 (辞典項目) ▼東欧革命後の政治体制 (柴宜弘他編『新版 東欧を知る事典』656-658, 平凡社, 2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼European Migrant/Refugee Crisis and General Election in Poland: Does the Migrant/Refugee Issue Matter? Pre-Symposium Session, Middle-Eastern Migration/Refugees and European Integration from Eurasian Viewpoints, SRC (2015.12.9) ▼移民/難民問題とポーランド: 東欧の「例外」から「一員」へ, 国際シンポジウム: 中東難民と欧州統合, 明治大学 (2016.3.24)

**高橋沙奈美** ㊦ 1 学術論文 ▼ブッダの世界の小さな花: エレーナ・ガンの『ウトバーラ』が描くカルムイク仏教の世界『国立民族学博物館研究報告』40(2):235-251 (2015) ▼Понятие о религии и религиозных феноменах в Японии (Е.И. Аринин (ред.) *Феномен религии и религиозности: концептуализация в академическом философском религиоведении*, 90-107, Vladimir, 2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ベテルブルグの福者クセーニヤ: 反宗教政策とソヴィエト的「民衆宗教」としての「聖人」崇敬, ソビエト史研究会2015年度年次研究大会, 専修大学 (2015.5.14) ▼Traditional and Modern Style of Belief: The Veneration for St. Xenia in Late Socialist and the Post-Soviet Russia, the 33rd ISSR Conference “Sensing Religion,” Louvain-la-Neuve, Belgium (2015.7.2-7) ▼Saints in Soviet Russia: Keeping and Changing the Popular Faith, International Joint Workshop “Memories of Socialism and Today: Religion, Politics, and Nationalism,” SRC (2015.8.1) ▼The Experience of Soviet “Modernization” for Old Believers in Latvia, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.4) ▼Ксения Блаженная в Ленинграде: Пост-сталинская религиозная политика и народное православие в Советской России, Международная конференция «После Сталина. Реформы 1950-х годов в контексте советской и постсоветской истории», Ekaterinburg, Russia (2015.10.15-17) ▼Rethinking the Legend of Tsar’s Family: Nationalist or Religious Veneration?, HU and SNU Joint Conference “Russian Culture: Daily Life and Festivity,” Seoul National University (2015.12.19)

**田畑伸一郎** ㊦ 1 学術論文 ▼油価低落と制裁下のロシア: 2014年マクロ経済実績の分析『ロシアNIS調査月報』60(5):1-25 (2015.5) ▼2000年代以降におけるロシア極東の経済発展『ユーラシア研究』53:31-35 (2016) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼(田畑朋子と) A Preliminary Analysis of the Socio-economic Development of Arkhangelsk and Murmansk Regions after the Collapse of the USSR, Arctic Science Summit Week, 富山国際会議場 (2015.4.27) ▼(Yulia Vymyatninaと) Causes of Inflation in Russia, 2000-2013, First World Congress of Comparative Economics, Roma Tre University, Rome (2015.6.26) ▼(Yulia Vymyatninaと) Causes of Inflation in Russia, 2000-2013, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.6) ▼ロシア経済の変動: 新しい成長モデルの模索 (共通論題), 第55回比較経済体制学会全国大会, 日本大学経済学部 (2015.11.8) ▼Import Substitution in Russia after 2014, 47th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Philadelphia (2015.11.21) ▼SRC in the 21st Century, Winter International Symposium of the SRC “Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60,” SRC (2015.12.10)

**地田徹朗** ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼(学会抄録) (ザウルハン・エルマハノフと) アラル海災害からの復興と小アラル海漁業『日本沙漠学会第26回学術大会(25周年記念大会)講演報告集』26:1-52 (2015.5) ▼(エッセイ) ICCEES IX 幕張大会参加記: 国際会議でのパネル組織の楽しさ『スラブ・ユー

ラシア研究センターニュース』142:10-14 (2015.8) ▼(ウェブエッセイ) アラル海は本当に消滅したのか? 「世界最悪の環境破壊」その後を追う『デジタル imidas』(2016.1) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼(ザウルハン・エルマハノフと) アラル海災害からの復興と小アラル海漁業, 日本沙漠学会第26回学術大会, 秋田(2015.5.24) ▼The Aral Sea Disaster and (Re-)bordering Process, 56th Annual Conference of Association for Borderlands Studies, Portland Marriott Downtown Waterfront, Portland, OR (2015.4.10) ▼Initial Mitigation Measures for Fishermen in the Aral Sea Crisis during the 1970-80s: The Case of Kazakhstan, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.7) ▼The Aral Sea Disaster and Initial Mitigation Measures by the Soviet Government, The Third Conference of East Asian Environmental History (EAEH2015), 香川大学 (2015.10.24)

**宍内勇津流** ㊦2 その他業績(論文形式) (4) 翻訳 ▼レムニョフ, アナトーリー著「19世紀のシベリアにおける大学問題」『環オホーツクの環境と歴史』4:3-21 (2015) ▼第10章 ダツィシェン, グリシャチョフ「ロシア東部における干渉への日本の参加(一九一七-二二年)」(五百旗頭真他編『日ロ関係史: パラレルヒストリーの挑戦』193-209, 東京大学出版会, 2015) ㊦3 著書 ▼(共編)『環オホーツクの環境と歴史4』106(サッポロ堂書店, 2015) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼スラブ派と19世紀ドイツ神学, 日本ロシア文学会北海道支部研究発表会, 北海道大学(2015.7.11) ▼ロシアにおけるフィラレート(ドロズドフ) 神学の研究動向, 「近現代ロシア文化におけるプラトンおよび古代ギリシア表象の諸問題」研究会, 早稲田大学(2016.3.2)

**長縄宣博** ㊦1 学術論文 ▼A Civil Society in a Confessional State? Muslim Philanthropy in the Volga-Urals Region (Adele Lindenmeyr, Christopher Read, and Peter Waldron, eds., *Russia's Home Front, 1914-1922, Book 2: The Experience of War and Revolution*, 59-78, Bloomington: Slavic Publishers, 2016) ▼ロシア近現代史の視点から(小澤実, 長縄宣博共編著『北西ユーラシア歴史空間の再構築: 前近代ロシアと周辺世界』[スラブ・ユーラシア叢書12] 291-314, 北海道大学出版会, 2016) ▼「第2章 イスラーム大国としてのロシア: メッカ巡礼に見る国家権力とムスリムの相互関係」[終章 地域大国と向き合う個人] 山根聡, 長縄宣博共編著『越境者たちのユーラシア』[シリーズ・ユーラシア地域大国論5] 51-76, 205-227, ミネルヴァ書房, 2015) ㊦3 著書 ▼(山根聡と編著)『越境者たちのユーラシア』[シリーズ・ユーラシア地域大国論5] 248(ミネルヴァ書房, 2015.12) ▼(小澤実と共編著)『北西ユーラシアの歴史空間: 前近代ロシアと周辺世界』[スラブ・ユーラシア叢書12] 342(北海道大学出版会, 2016.3) ㊦4 その他業績(著書形式) ▼「ロシアの膨張と帝国建設」[内憂外患と苦闘するロシア帝国]「コラム ロシアのイスラーム教徒から見た戦争」(南塚信吾, 秋田茂, 高澤紀恵共編『新しく学ぶ西洋の歴史: アジアから考える』ミネルヴァ書房, 2016) また, 編集委員として第9章, 第10章の編集を担当 ㊦5 学会報告・学術講演 ▼Russia's Place in the Global Muslim Connections, ca. 1800-1930: Sufism, Nationalism, and Anti-Imperialism, Summer International Symposium of the SRC "Russia and Global History," SRC (2015.7.30) また, シンポジウムの組織も担当 ▼"An Imperial Pathway: Karim Khakimov in the Southern Urals, Turkestan, and Iran (1919-1921)," "Roundtable: Globalizing Russian and Soviet History," 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.7-8) ▼宗教行政と公共圏: ヴォルガ・ウラル地域のムスリムの銃後, ロシア史研究会 2015 年度大会共通論題「第一次世界大戦とロシア(II): 戦争・帝国・民族, 早稲田大学 (2015.10.11) ▼秋葉淳, 橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史: オスマン帝国からの展望』をめぐって, 比較教育社会史研究会 2015 年秋季例会, 青山学院大学 (2015.10.25)

**野町素己** ㊦1 学術論文 ▼The Rise, Fall, and Revival of the Banat Bulgarian Literary Language: Sociolinguistic History from the Perspective of Trans-border Interactions (Tomasz Kamusella, Motoki Nomachi and Catherine Gibson, eds., *The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders*, 394-428, London: Palgrave MacMillan, 2015) ▼Whose Literature? Aspects of Banat Bulgarian Literature in Serbia (Abe Kenichi, ed., *Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames* [Slavic Eurasian Studies No. 30], 179-192, SRC, 2016.3) ▼Observations on the Use of Past Tense Forms in Banat Bulgarian in the Context of Language Contact with Serbian: The Case of Matija Bančov (Miloš Kovačević and Vladimir Polomac, eds., *Putevima srpskih idioma. Zbornik u čast prof. Radivoju Mladenoviću povodom 65. rođendana*, 255-266, Kragujevac: Filum, 2015) ▼Is a New Slavic Language Born? The Ethnolect of the Kosovan Gorans (A Jubilee Collection: Essays in Honor of Prof. Paul Robert Magocsi on His 70th Birthday, 441-452, Uzhhorod-New York: V. Padiak Publishers, 2015) ▼Language Contact and Structural Changes in Serbian and Other Slavic Languages in the Banat Region (Ljudmila Popović, Dojčil Vojvodić and Motoki Nomachi, eds., *У простору лингвистичке славистике: Зборник радова повodom 65 година живота академика Предрага Пипера*, 549-565, Beograd: Filoloski fakultet Univerziteta u Beogradu,

2015) ▼ On the Second Be Periphrasis (BE-2) in Kashubian: Its Grammatical Status and Historical Development, *SLAVIA: časopis pro slovanskou filologii*, 84(3):1-16 (2015) ▼ (Biljana Sikimić と) Jezički pejzaž memorijalnog prostora višejezičkih zajednica: Banatski Bugari u Srbiji, *Južnoslovenski filolog*, 72:1-2 (2016) ¶ 2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (エッセイ) イェジ・トレデル教授 (1942-2015) を悼む『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』141:15-17 (2015.5) ▼ Измебу Истока и Запада, *Политика* (2015.9.23) ▼ О белорусско-украинском альманахе *Справа, Справа*, 3:9-10 (2016) ▼ A Few Words about Professor Jerzy Treder's Article (Abe Kenichi, ed., *Perspectives on Contemporary East European Literature: Beyond National and Regional Frames* [Slavic Eurasian Studies No. 30], 195-196, SRC, 2016.3) ¶ 3 著書 ▼ (Tomasz Kamusella, Catherine Gibson と共編著) *The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders*, 561 (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2016) ▼ (Ljudmila Popović and Dojčić Vojvodić と共編著) У простору лингвистичке славистике: Зборник радова поводом 65 година живота академика Предрага Пипера, 800 (Филолошки факултет Универзитета у Београду, 2015) ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ О начале новой «дезинтеграции» и «интеграции» сербохорватского языка: этнолект горанцев и их идентичность в социолингвистическом освещении, 13 Балканские чтения, Институт славноведения РАН, Россия (2015.4) ▼ 基調講演: Dative of External Possession in Croatian: From an Areal-Typological Perspective, 5. Hrvatski sintaktički dani, Filozofski fakultet u Osijeku, Croatia (2015.5) ▼ 基調講演: Banat Bulgarian in Present-Day Serbia: A Language Emancipation Perspective, *Dynamika rozwoju gwar słowiańskich w kontekście dziedzictwa narodowego i kulturowego*, University of Warsaw, Poland (2015.6) ▼ (Biljana Sikimić と) Placing the Banat Bulgarian Language: Fluctuating Identity and Semiotics of Power Relations in a Multiethnic Region, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8) ▼ (Bojan Belic と) Standardized Yet? Aspects of the Standard Language Ideology in Serbia and Poland, Heidelberg University, Germany (2015.9) ▼ On the Second Be Periphrasis in Kashubian Revisited, 40-ое заседание грамматической комиссии МКС, Институт русского языка им. В.В. Виноградова РАН, Россия (2015.9) ▼ On the Kashubian Periphrasis, 47th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), Philadelphia (2015.11) ▼ О Зборнику „Српски измебу Истока и Запада“, Belgrade University, Serbia (2015.5) ▼ Contact-induced Changes in Kashubian Morpho-syntax (with a Glance toward Balkan Slavic), *Languages Meet in the Central Balkans*, Hotel Drim in Struga, Macedonia (2015.6) ▼ 招待講演: Slavic Languages in the Balkans: Before the War and After, Pace University, USA (2015.11) ▼ 招待講演: What Is the Banat Bulgarian Literary Language?, University of Belgrade, Serbia (2015.11) ▼ Questions of the Gorani Ethnolect in the Context of the Disintegration of Serbo-Croatian, Ghent University, Belgium (2016.2)

**日臺健雄** ¶ 1 学術論文 ▼ 現代ロシアにおける中間層の形成: 資源依存型経済における経済成長と階層分化の動向『歴史と経済』227-21-30 (2015) ▼ ロシアのアジア政策 政権支持率の上昇と極東への挺入れ (アジア経済研究所編『アジア動向年報2015』51-68, JETRO アジア経済研究所, 2015) ▼ On Some Aspects of Soviet Kolkhoz Farmers' Attitude toward the Stalin Regime『埼玉学園大学紀要 (経済経営学部篇)』15:15-24 (2015) ▼ 「第6章 現代ロシアにおける中間層の形成: 資源依存型経済における経済成長と階層分化の動向 (SGCIME 編『グローバル資本主義と新興経済』179-202, 日本経済評論社, 2015) ▼ 「小幡段階論」と経済史研究 (勝村務他編『経済原論研究への誘い』78-86, 響文社, 2016)

¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ On Some Aspects of Soviet Kolkhoz Farmers' Attitude toward the Stalin Regime, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.5) ▼ コルホーズ市場における取引内容と住民生活: 1930年代後期ソ連スヴェルドロフスク州の事例を中心に, ロシア史研究会 2015 年度大会, 早稲田大学 (2015.10.10)

**ブフ・アレクサンダー** ¶ 1 学術論文 ▼ Claiming Japan's "Northern Territories" from the Margins: The Early Irredentist Grassroots Movement, *Dokdo Research*, 18:416-440 (2015.6) ▼ Introduction: Borders and Civil Society, *Journal of Territorial and Maritime Studies* (特集号 Borders and Civil Society in Asia) 2(2):5-8 (2015.8) ¶ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ Territorial Dispute between Japan and Korea over Dokdo/Takeshima (Emmanuel Brunet-Jailly 他編 *Border Disputes: A Global Encyclopedia*, 298-309, Santa Barbara: ABC CLIO, 2015)

**古川浩司** ¶ 1 学術論文 ▼ 領土問題の再構成 (木宮正史編『朝鮮半島と東アジア』45-71, 岩波書店, 2015) ¶ 3 著書 ▼ (佐道明広他と共編著)『資料で学ぶ国際関係 (第2版)』230 (法律文化社, 2015.4)

¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ Activating Japan's Borderlands: Three Years of Activities of the Japan International Border Studies Network, Association for Borderlands Studies, Portland, USA (2015.4.10)

望月哲男 ① 1 学術論文 ▼古儀式派信徒の肖像：『死の家』の風景から（『ドストエフスキー カラーゾフの預言』157-168, 河出書房新社, 2016.1） ▼Новый подход к модернизму? По поводу современного дискурса о формализме и риторике, *Зборник Матице Српске за славистику*, 88:245-257 (2015) ① 2 その他業績（論文形式）(5) その他 ▼「トルストイと現代 ②中国人への手紙 ③愛と非暴力 ④非暴力主義 ⑤西洋と東洋 ⑥旅の刻印 ⑦弱者救済 ⑧思想の構築 ⑨渦巻く批判 ⑩今に生きる思想」『秋田魁新報』(2015.4.3) (2015.4.10) (2015.4.17) (2015.4.24) (2015.5.1) (2015.5.8) (2015.5.15) (2015.5.22) (2015.6.5) ▼（テキスト紹介）名場面からたどる『罪と罰』（第1回）『NHK テキスト まいにちロシア語』4月号:110-119 (2016.3) ① 5 学会報告・学術講演 ▼Облик Центра славянско-евразийских исследований и русистика (славистика) в Японии, 首都師範大学, 北京 (2015.4.17) ▼ロシア文学の風景「文学のヴィジョン、音楽のエクスタシー：ロシア小説と音楽への誘い」ユーラシア世界を知るための市民教養講座, 千葉商工会議所 (2015.5.13) ▼ドストエフスキーにおける古儀式派、分離派、セクトのイメージ：その形成と文学的機能, 第4回古儀式派研究集会, 電気通信大学 (2015.5.30) ▼Японская русистика в XXI в.: Исследование и перевод, 9th World Congress of International Council for Central and East European Studies (ICCEES), 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.6) ▼По поводу ситуативного сравнения у Толстого и Набокова, 9th World Congress of ICCEES, 神田外国語大学, 幕張 (2015.8.7) ▼Photographing Russia in Natural Colors: S. M. Prokudin-Gorsky's Project of "Homeland-study (Rodinovedenie)," International Conference: Photographing Asia: Images of Russia's Orient in the 19th and 20th Centuries, Ludwig Maximilians University, Munich (2015.9.17) ▼Visual Memory between Ethnology and Art: Phases of Reality and Daily Life in Prokudin-Gorsky's "Homeland-study," HU and SNU Joint Conference "Russian Culture: Daily Life and Festivity," Seoul National University (2015.12.18) ▼ラスコーリニコフの最初的一步：『罪と罰』第1篇を拾い読む, 第16回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 (2016.3.25)

## 編集室だより

### ◆ ゲチノヴァ著『ラーゲリを描く』の刊行 ◆

エルザ＝バイル・ゲチノヴァ著『ラーゲリを描く：ソ連抑留日本軍人の記憶におけるトラウマの言語 Рисовать лагерь. Язык травмы в памяти японских военнопленных о СССР』が刊行されました。抑留の体験を描いた絵画・マンガ・絵日記などのビジュアルな表現を文化人類学的手法により分析したいへんユニークな研究書です（カラーの図版も多数掲載されています）。ゲチノヴァ氏はスターリンによる強制移住の対象となったカルムイク人の苦難を調査した研究で知られており、今回の抑留日本人の研究にもその知見が生かされています。[越野]



### ◆ ACTA SLAVICA IAPONICA ◆

7月15日に第38号の投稿が締め切られました。今回は、論文15本、書評6本の投稿があり、昨年と同じような水準です。2017年3月の刊行を目指しています。[野町]

## 会議 (2016年6～7月)

### ◆ センター協議員会 ◆

2016年度持ち回り 6月14日(火)～6月21日(火)

議題

1. 国際連携研究教育局職員への任命について

2016年度第1回 6月29日(水)

- 議題 1. 助教の人事について

2016年度第2回 7月22日(金)

- 議題 1. 助教人事に関する選考委員会報告について  
2. 再雇用特任教員の再雇用について  
3. 平成27年度支出予算決算(案)について  
4. 平成28年度支出予算配当(案)について

2016年度第3回 7月26日(火)

- 議題 1. 助教授補者の選考について

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2016年度第1回 7月30日(土)

- 議題 1. 共同利用・共同研究拠点の活動について  
2. 共同利用・共同研究公募のあり方について  
3. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について [事務係]

# みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース145号以降のセンター訪問者(客員、道央圏を除く)は以下の通りです(敬称略)。  
[田畑/大須賀]

- 5月13日 小森宏美(早稲田大)  
5月17日 齋藤大輔(ロシアNIS貿易会ロシアNIS経済研究所)  
5月18日 中田瑞穂(明治学院大)  
5月19日 Evžen Kočenda(カレル大、チェコ)  
5月20日 藤原克己(大阪大)  
5月28日 Sergei Taranets(ウクライナ科学アカデミー)、Svetlana Vasil'eva(ブリヤート国立大、ロシア)、豊川浩一(明治大)  
5月31日 阪本秀昭(天理大)  
6月7日 松寄英也(上智大)  
6月8日 Diliara Usmanova(カザン大、ロシア)  
6月10日 岡部芳彦(神戸学院大)  
6月22日 Jason Wittenberg(カリフォルニア大、米国)  
6月23日 朱永浩(福島大)  
7月2日 海野典子(東京大・院)、岡奈津子(アジア経済研究所)、松本ますみ(室蘭工業大)  
7月6-8日 Pami Aalto(タンペレ大、フィンランド)、Pavel Baev(オスロ国際平和研究所、ノルウェー)、Dmitry Baranov(ロシア人類学博物館)、Otto Boele(ライデン大、オランダ)、Cheng Baozhi(上海国際問題研究院、中国)、Sergey Golunov(九州大)、Daria Gritsenko(ヘルシンキ大、フィンランド)、Eini Haaja(トゥルク大、フィンランド)、Lassi Heininen(ラップランド大、フィンランド)、Tobias Holzlehner(マルティン・ルター大、ドイツ)、Peter Hsing(香港大)、Jussi Huotari(ヘルシンキ大、フィンランド)、Hyun SooKim(仁荷工業専門大、韓国)、Kang KukJin(海洋システム安全研究所、韓国)、Liu Xu(中国人民大)、Arbakhan Magomedov(ウリヤノフスク国立大、ロシア)、Hanna Mäkinen(トゥルク大、フィンランド)、Sergei Medvedev(モスクワ高等経済学院、ロシア)、Hema Nadarajah(ブリティッシュコロンビア大、カナダ)、Juha Saunavaara(オウル大、フィンランド)、Alexander Sergunin(サンクトペテルブルグ国立大、ロシア)、Elena Shadrina(明治大)、Shao Hsuanlei(国立台湾師範大)、Sun Mingrui(上海外国語大、中国)、Tu Jingfung(中国極地研究センター)、Veli-Pekka Tynkkynen(ヘルシンキ大、フィンランド)、Wang Luo(中国極地研究センター)、Xu Hua(水運科学研究院、中国)、Yang Jian(上海国際問題研究院、中国)、Zhang Yao(上海国際問題研

究院、中国)、安達祐子(上智大)、大石侑香(日本学術振興会)、大西富士夫(日本大)、大野成樹(旭川大)、奥龍司(室蘭工業大)、長部太郎(日立製作所)、片山博文(桜美林大)、鍛冶広真(東京大)、北川弘光(海洋政策研究財団)、雲和広(一橋大)、合田浩之(日本郵船株式会社)、兒玉裕二(国立極地研究所)、清水保彦(外務省)、高倉浩樹(東北大)、徳永昌弘(関西大)、兵頭慎治(防衛研究所)、廣瀬陽子(慶應義塾大)、深澤理郎(国立極地研究所)、古市正彦(京大)、本村真澄(JOGMEC)、山本雄輝(上智大)、湯浅剛(広島市立大)

7月14日 細川瑠璃(東京大・院)

7月20日 Andrijana Cvetkovikj (駐日マケドニア共和国大使)

7月25日 Mukaddam Akhmedova(筑波大)、Janis Balodis(ヨーロッパ大、ラトビア)、Micah Carpio(デ・ラ・サル大、フィリピン)、Polly Cegielski(マサチューセッツ大、米国)、Chao YeuKuang(国立彰化師範大、台湾)、Chuang YaYu(同)、Aleksander Diener(カンザス大、米国)、Fidea Encarnacion(デ・ラ・サル大、フィリピン)、Alicja Fajfer(東フィンランド大)、Fan Keyan(富山大)、Paul Fryer(東フィンランド大)、Hsuan TsenYu(国立彰化師範大、台湾)、Huang YinTai(同)、Kei Peijun(同)、Kim Jihyun(筑波大)、Ko NienTzu(国立彰化師範大、台湾)、Kuo MeiJu(同)、Thomas Kyeremeh(ガーナ大)、Lee HsinYi(国立彰化師範大、台湾)、Roksolana Lavrinenko(筑波大)、Adam Lenton(パリ政治学院、フランス)、Li YiChen(国立彰化師範大、台湾)、Ekaterina Mikhailova(モスクワ国立大)、Jon Olafsson(九州大)、Szymon Parniewski(パーミンガム大、英国)、Fathima Shifna(九州大)、David Shim(フロニンゲン大、オランダ)、Tsoi EnKhi(建国大、韓国)、Tung HsiangChing(国立彰化師範大、台湾)、Alexander Turbin(極東連邦大、ロシア)、Joni Virkkunen(東フィンランド大)、Wang ZiYing(国立彰化師範大、台湾)、Yang ChingYuan(同)、Yu TzuYun(同)、田村史則(ソウル大、韓国)、野部公一(専修大)、藤牧直親(X-Elio Japan 株式会社)、堀江典生(富山大)

7月28日 井田克征(金沢大)、河合洋尚(国立民族学博物館)、杉本良男(同)、小林宏至(山口大)

7月30日 五十嵐徳子(天理大)、井上貴子(大東文化大)、岩崎一郎(一橋大)、大島美穂(津田塾大)、窪田順平(総合地球環境学研究所)、黒木英充(東京外国語大)、佐藤八郎(福島県飯館村村会)、豊川浩一(明治大)、中村唯史(京大)、三谷恵子(東京大)

### ◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は2016年1月7～18日の間、資料収集のため、米国に出張。3月12～22日の間、資料収集のため、米国に出張。5月16～18日の間、“15th Border Regions in Transition (BRIT) Conference” 出席・研究発表及び研究打合せのため、ドイツに出張。4月18日～5月20日の間、研究打合せ及び資料収集のため、ドイツに出張。

宇山智彦研究員は1月24～30日の間、“9th Europe-Ukraine Forum” 出席・報告、また、ウクライナにおける歴史認識に関する文献調査及びインタビューのため、ポーランド、ウクライナに出張。5月17～26日の間、International Scientific Conference “Rethinking the 1916 Uprising in Central Asia” 出席・研究発表、また国際会議「1916年トルキスタン反乱：事実と解釈」出席・研究発表、資料収集及び研究打合せのため、クルグズスタン、ロシアに出張。

野町素己研究員は2月28日～3月4日の間、北海道大学交流デー(ゲント) 研究交流セミナー開催及び研究打合せのため、ベルギーに出張。3月20～24日の間、意見交換及び研究打ち合わせのため、米国に出張。4月19～26日の間、「第13回スラヴ学会 ルセリナ・ニツォロヴァ教授生誕75年記念研究集会」出席及び研究発表のため、ブルガリアに出張。4月27日～5月3日の間、“20th Balkan South Slavic Conference” 出席・研究発表及び研究打合せのため、米国に出張。

越野剛研究員は2月28日～3月4日の間、北海道大学交流デー(ゲント) 研究交流セミナー開催及び研究打合せのため、ベルギーに出張。3月5～11日の間、現地調査のため、ベトナムに出張。

家田修研究員は3月5～12日の間、リポジトリ事業に関する研究成果発表及び意見交換のため、英国に出張。長縄宣博研究員は3月8～27日の間、資料収集及び現地聞き取り調査のため、ロシアに出張。

田畑伸一郎研究員は3月10～17日の間、“Arctic Science Summit Week 2016” 出席及び研究打ち合わせのため、米国に出張。6月12～16日の間、“The 3rd High-Level Idea Tank Forum of China-Eurasian Economic Union Cooperation 2016” 出席、研究打合せのため、中国に出張。

岩下明裕研究員は3月23～27日の間、フォーラム“The Emerging China-Russia Axis: The Return of Geopolitics?” 出席及び研究打合せのため、米国に出張。4月12～20日の間、“58th ABS / WSSA Annual Conference” 出席・研究発表及び研究打合せのため、米国に出張。 [事務係]

## 目 次

研究の最前線 .....	1
2016 年度夏期国際シンポジウムが開催される／ボーダースタディーズ・サマースクール開催される／マケドニア共和国大使がセンターを訪問される／2015 年度「北大デー」、ゲント大学（ベルギー）にて開催される／2016 年度科学研究費プロジェクト／北大祭期間中にセンター一般公開が開催される／Border Regions in Transition (BRIT) 第 15 回大会の開催／UBRJ：北大総合博物館にて「国境観光」第二期展示がオープン／2016 年度鈴川・中村基金奨励研究員決まる／研究会活動	
第 6 回国際ポーランド学者会議でパネルを組織して by野町素己.....	10
学界短信 .....	12
学会カレンダー	
図書室だより.....	13
皓星社の雑誌索引データベース事業に協力	
誰が 何を どこで.....	13
編集室だより.....	19
グチノヴァ著『ラーゲリを描く』の刊行／ACTA SLAVICA IAPONICA	
会議（2016 年 6 ～ 7 月）.....	19
センター協議員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会	
みせらねあ.....	20
人物往来／研究員消息	

---

2016 年 8 月 31 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	田畑伸一郎
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---